

春風亭柳枝と「四段目」

「五十日間の真打披露興行。途中、『もうこれまでかな』という節目が何度かありましたが、それでも何とかやり通すことができました。ただ、国立（演芸場）だけが一日欠けちゃった……。だからね、四十九日なんですよ」

柳枝が真打披露のトリで演じたのは、「子別れ」「愛宕山」（以上、上野）、「明烏」「妾馬」（新宿）、「佐々木政談」「火焰太鼓」（浅草）、「三枚起請」「甲府い」（池袋）、「船徳」「大工調べ」（国立）の計十席だった。長屋物、廓噺、政談、若旦那物など、主要ジャンルの「これだ!」という演目が網羅されており、柳枝の力量とこれまでの精進ぶりがうかがえる。

『柳枝は何でもできる』と言ってくれる人もいますが、『じゃ、柳枝ならコレというネタは何?』と聞かれると、自信を持って答えることができないんです。披露興行が終わった今、披露目でできなかったネタを演じながら、自分の持ちネタを振り返っています」

そんな披露目で演じていない噺の一つ、「四段目」は五年ほど前、先代春風亭柳朝一門では叔父に当たる一朝に稽古を願った。

「芝居好きの主人公が、閉じ込められた蔵の中で芝居の真似をする。そこが一番の見どころですよ。同趣向の『七段目』なら、言葉は悪いけど、『だいたいこんな感じ』でやっても何とかできます。ところが、『四段目』は芝居の描写がきっちりできないと話自体が生きてこない。芝居を真似する時間も長いので、ごまかしが効きません」

もともと歌舞伎好きの柳枝だが、「四段目」を演じるにあたって、『仮名手本忠臣蔵』を何度も見直したという。

「自分で演じる気で見ていると、意外な発見がありますね。落語と歌舞伎のセリフはまったく同じではないの。『四段目』の由良之助は、落語のようにバタバタとは出てこないし、判官の『待ちかねたァ〜』もさらりと言っている。そのまま真似すれば本物の芝居に見える、というわけじゃないんですよ」

柳枝版「四段目」のもう一つの魅力は、小僧の定吉の何とも言えぬ愛らしさだ。

「もともと子供が好きで、塾講師なんかもやっていました。自分の子供（現在、一歳半）ができたなら、もうメロメロですよ。（『双蝶々』の）定吉殺しの場面なんか、絶対にできませんよ!」

芝居と子供、好きなものばかりが登場する噺だが、「四段目」は演じてみると、なかなかの難物なのだった。

こういうネタに向き合い続けて行く先に、「何でもできる」柳枝の、本当の十八番ネタが見えてくるのかもしれない。(長井好弘)

☆ 長 井 好 弘(演芸評論家)

1955年8月10日、東京・江東区深川新大橋生まれ
元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。

浅草芸能大賞専門審査員。

『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』

『新宿末広亭のネタ帳』

『寄席おもしろ帖』

ほか著書・編書多数。

TBSテレビ主催 第五次「落語研究会」プログラムに
2003年3月から「当世噺家気質」を執筆中